

- \* 信仰の闘いにおいて、神様からもらった素晴らしい武具をつけていても、それらが有効に生かされるために必要なことがある。それは「祈り」である。  
「祈り」とは神との交わりのこと。神との人格的な対話である。私たちが信じる聖書の神は、私を造り、愛してくださっている絶対に頼りになる神である。そんな神なので、真剣に祈ることができるのである。
- \* 「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」(エペソ6:18) ジョン・バニヤン(17世紀イギリスの説教者、作家)の祈りを集めた「ジョン・バニヤンによる祈りの力」の本を「祈り会」で読み続けているが、彼が一貫して主張しているのは祈りにおける聖霊の働きと助けである。祈りに聖霊が働いてくださるためには、先ず、神の前に心を完全に開くことである。自分は神の前にどれほど小さく罪多き人間なのかを自覚していないと少しでも自分の力や能力に頼ることになり、祈りの意味がない。イエスはゲッセマネの園で真剣に祈っておられるときに、弟子たちが寝てしまっていたことを主イエスはとがめられた。私達も「お祈り」が「お寝入り」にならないように。祈りは忍耐とエネルギーが要るものである。
- \* 祈りは神との相互コミュニケーションであるから、祈りっ放しではいけない。私の祈りを神様はどう聞いて、どう答えてくださるのか、神の声を待ち望んで聞くことも祈りの一部である。そうでないと、神からの答えに対して感謝を忘れることになったり、答えに気が付かないでいることにもなる。
- \* 私たちは先ず自分のために祈る。それは良いことであるが、人のために祈る執り成しの祈りはもっと大切である。パウロは、「すべての聖徒のために祈ってください。」と言い、また、私パウロのために祈ってください、とエペソの信徒たちに求めている。彼は今ローマの牢獄から書いているが、牢にいても思いはイエス・キリストを語り続けることである。彼は福音を語る「福音大使」と公言し、それを実行してきた。パウロほどの人が人の祈りなど必要がないと思われるかもしれないが、その実は逆で、共に戦う祈りの戦士なくしては、困難を乗り越えていくことはできなかった。
- \* 私達も一人一人福音大使として立てられている。救いの福音、平和の福音が日本に、また世界に広がっていくことを望む。そのために常に互いに執り成しの祈りをする者になりたい。